

房総における縄文時代中期環状集落の成果と課題

－半世紀を超える大規模調査の成果から－

清 藤 一 順

目 次

はじめに	181
1 主な環状集落遺跡の調査	181
(1) 船橋市高根木戸貝塚	181
(2) 松戸市子和清水遺跡	183
(3) 有吉北貝塚	183
(4) 市原市草刈貝塚	183
(5) 流山市中野久木谷頭遺跡	183
(6) 柏市小山台遺跡	185
(7) 柏市大松遺跡	185
(8) 群馬県赤城村三原田遺跡	187
2 縄文時代中期環状集落の全面調査による成果と課題	187
(1) 環状集落の形態と構成	187
(2) 生産関係遺物等からの集落の役割	192
(3) 小竪穴の再認識	196
まとめ	199

はじめに

千葉県での縄文時代集落の全面発掘は、昭和39年（1964年）～同40年（1965年）に住宅公団による区画整理事業に伴い実施された、縄文時代後期を中心とした松戸市貝の花貝塚に始まる。

以降、昭和40年代後半、全国的な高度成長経済の中、千葉県では国・県による成田ニュータウン、成田国際空港、東関東自動車道、千葉ニュータウン・千葉東南部等の建設事業に関連しては財団法人千葉県文化財センター等により、各市町村における大規模土地区画整理事業等の様々な開発事業に伴っては、各市町村教育委員会・調査会等により、縄文時代に限らない多くの遺跡の全面発掘が行われることとなる。

本稿では、縄文時代中期における環状集落に焦点をあて、全域に近い調査・報告された県内外遺跡の幾つかの成果を取り上げ、縄文時代中期環状集落に係る課題の一部ではあるが考古学的に考えてみたい。

房総では、昭和40年代以降、以下に述べる遺跡をはじめとした多くの遺跡が調査され、遺跡の全体像を知ることができる機会が増加し、縄文時代中期集落等の全容を知るデータが蓄積されてきた。しかし、集落等の全面調査による多様な情報が、遺跡の姿の断片しかくみ取ることができない現状であるが、疑問を持っていた幾つかのテーマについて述べてみたい。縄文時代中期環状集落の全面調査の一部に関わったひとりとして、遅きに失したが、自省の意味を込め述べるのが責務と考えるからである。

蛇足ではあるが、今日では遺跡の全面調査が行われることは数多く見られ、発掘調査を担当する組織・調査担当者は、多岐にわたる規則等を踏まえ、充実した計画により、円滑に行われることが定着しつつある。一方、遺跡の全面発掘から得られる総合的な情報に関して、十分な問題意識をもって整理・報告されているかについての疑問を感じるのは筆者だけであろうか。遺跡の部分的な発掘調査と変わらない内容の報告書が多いことは何故であろうか。

1 主な環状集落遺跡の調査

ここでは、昭40年代に始まる、縄文時代中期環状集落のほぼ全域に及ぶ房総及び若干の県外で実施された調査例を紹介し、各遺跡の集落の内容、出土した特に生産関係遺物、精神的遺物を中心に、各遺跡の特徴的事項について紹介する。

東京湾水系

(1) 船橋市高根木戸貝塚

(図1、表1-1)

遺跡は、船橋市西習志野1丁目、新京成線高根木戸駅の南約500mの距離に所在する。現在の東京湾に注ぐ海老川の支流である飯山満川を臨む、標高約27～30mの台地上に遺跡は立地している。

発掘調査は昭和42年度（1967年）～43年度（1968年）にかけて約110,000㎡について行われ、住居跡

表1 主要環状集落の主な遺構数

	遺跡名	竪穴住居跡	小竪穴（土坑を含む）
1	船橋市高根木戸貝塚	75	129(1.7)
2	松戸市子和清水遺跡	278	約1,000(3.6)
3	千葉市有吉北貝塚	134	580(4.3)
4	市原市草刈貝塚	約300	約1,000(3.3)
5	流山市中野久木谷頭遺跡	195	1,065(5.5)
6	柏市小山台遺跡（北）集落	195	479(2.5)
7	柏市小山台遺跡（南）集落	184	862(4.7)
8	柏市大松遺跡	86	232(2.7)
9	群馬県渋川市三原田遺跡	333	約2,000(6.0)

※1（ ）内は住居跡1軒あたりの数量

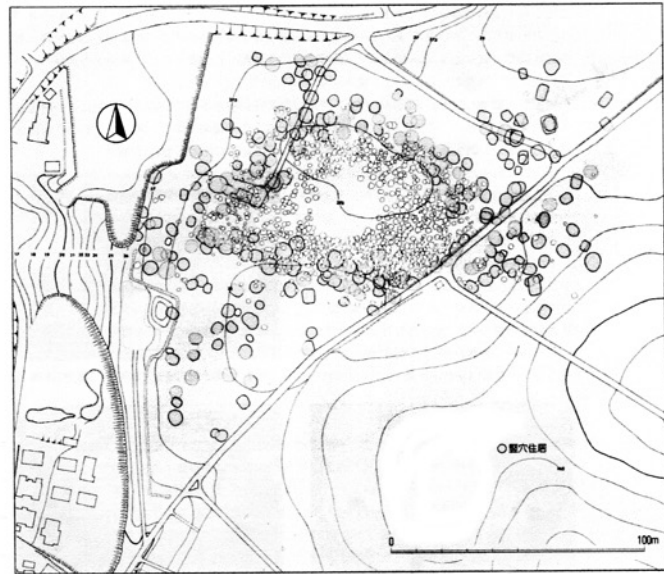
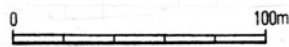
75軒、小竪穴129基、8体の人骨が検出されているが、遺跡の約1/3ほどは土砂採取により削平されていた。なお、当時は縄文時代中期の住居跡群に隣接し、主に集落中央部に向かって小竪穴という土坑が存在することが認知されていなかったことから、環状集落の内側が充分調査されておらず、小竪穴の検出数は半減していると考えられる。

土器以外の、特に生業を示す遺物は土器片錘が約2,000点、石製品では石鏃80点、磨製石斧は局部磨製石斧を含み報告書の表合計では約50点、図化された合計は73点、打製石斧は表合計で約115点、図化されたもの121点出土している。

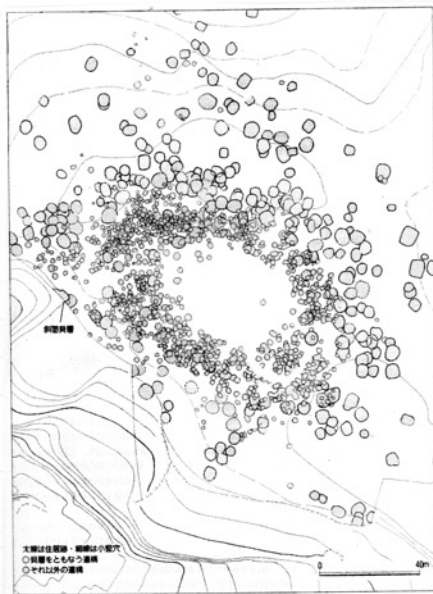


船橋市高根木戸貝塚

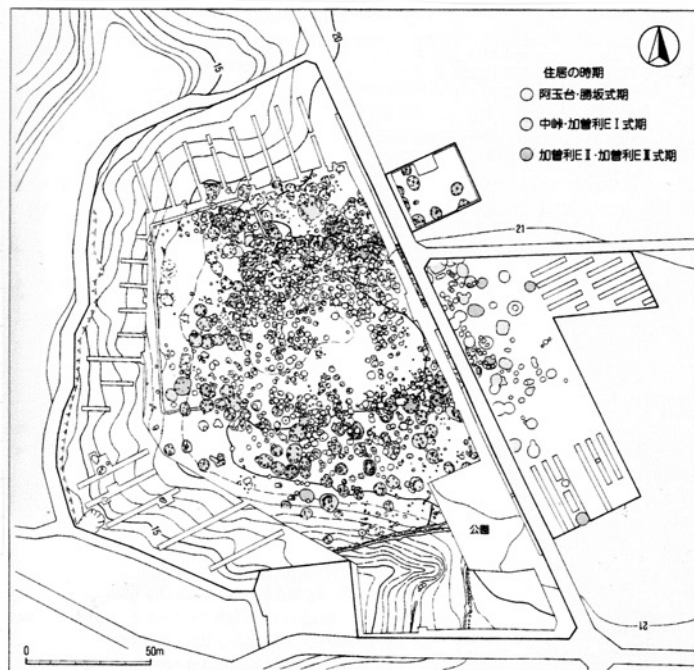
以後の遺構分布図の縮尺は、
すべて約3千分の1に統一



松戸市子和清水遺跡



市原市草刈貝塚



流山市中野久木谷頭遺跡

図1 房総の主な環状集落(1)

(2) 松戸市子和清水遺跡 (図1、表1-2)

遺跡は、JR武蔵野線新八柱駅・新京成線八柱駅からほぼ東に約600m、国分谷最奥部の支谷左岸の標高約28mの舌状台地状に所在し、東西約130m、南北約100mの範囲に点列状に貝層が分布し、環状の東側及び南西側には環状の中心からやや離れて存在する住居跡群が見られる。

調査は、昭和37年(1952年)に高橋良二氏、昭和43年(1968年)に松戸市教育委員会による小規模な調査が行われているが、区画整理に伴う本格的調査は、昭和47年(1972年)～昭和50年(1975年)まで、土砂採取により破壊されていた南東部の一部を除き行われた。

調査の結果、中期の竪穴住居跡278軒、小竪穴約1,000基が検出され、埋葬人骨5体が確認されている。埋葬場所は廃屋4体、小竪穴1体である。

集落は環状集落の外縁部から内側にかけて建替えられた傾向が見られ、また、西側の台地縁辺部付近に住居群が比較的希薄である部分が認められるが、谷へと向かう集落の出入り口であろうか。

生産関係の遺物は、石鏃347点、打製石斧558点、磨製石斧167点、土器片錘862点である。なお、精神的遺物として土偶1点もある。

調査は、後述する群馬県三原田遺跡の発掘調査とほぼ同時期に行われ、縄文時代中期環状集落の遺跡全体を知る調査例の端緒であったことから、各方面の視察を受けるなどの注目を集めていた。

(3) 有吉北貝塚 (図2、表1-3)

遺跡は、JR外房線鎌取駅の南側約500mの位置にあり、東京湾から支谷を約1.5km遡った台地上に立地している。なお、南に約150m隔てて、同時期の縄文時代中期の環状貝塚・集落である有吉南貝塚が所在している。

発掘調査は昭和59年(1984年)～同62年(1987年)にかけて29,030㎡(うち斜面を中心とした貝層5,930㎡)について行われた。その結果、住居跡134軒、小竪穴580基を含む土坑770基が検出され、そのうち39軒の住居跡、53基の小竪穴には貝層が確認されている。また、南西、北東斜面には斜面貝塚が形成されている。

埋葬人骨は、住居跡、小竪穴から計14体確認されたほか、遺構内に散乱した4体分の人骨も見られる。

生産関係の遺物は、土器片錘5,354点、石製品では石鏃1,088点、打製石斧833点、磨製石斧310点、骨角製品では釣針6点、鏃7点、骨針も含むが刺突具約70点が出土している。

(4) 市原市草刈貝塚 (図1、表1-4)

遺跡は、JR内房線の浜野駅から南東方向に約4kmの市原市最北部に所在し、村田川を臨む台地上に立地している。発掘調査は、昭和53年(1978年)に実施された確認調査に基づき、本調査は昭和55年(1980年)～昭和60年(1985年)に行われた。

調査の結果、竪穴住居跡約300軒、小竪穴等の土坑約1,000基以上が検出され、その内貝層が約75軒住居跡、12基の小竪穴に、また、埋葬人骨が21軒の住居跡、6基の小竪穴等で合計46体確認されている。

生産関係の遺物として、石製品では石鏃103点、打製石斧458点(短冊形406点、撥形24点、分銅形28点)、磨製石斧103点、局部磨製石斧14点、土製品は土器片錘2,403点が出土している。

なお、南側斜面部に、有吉北貝塚に類似した貝層の存在が推測されている。

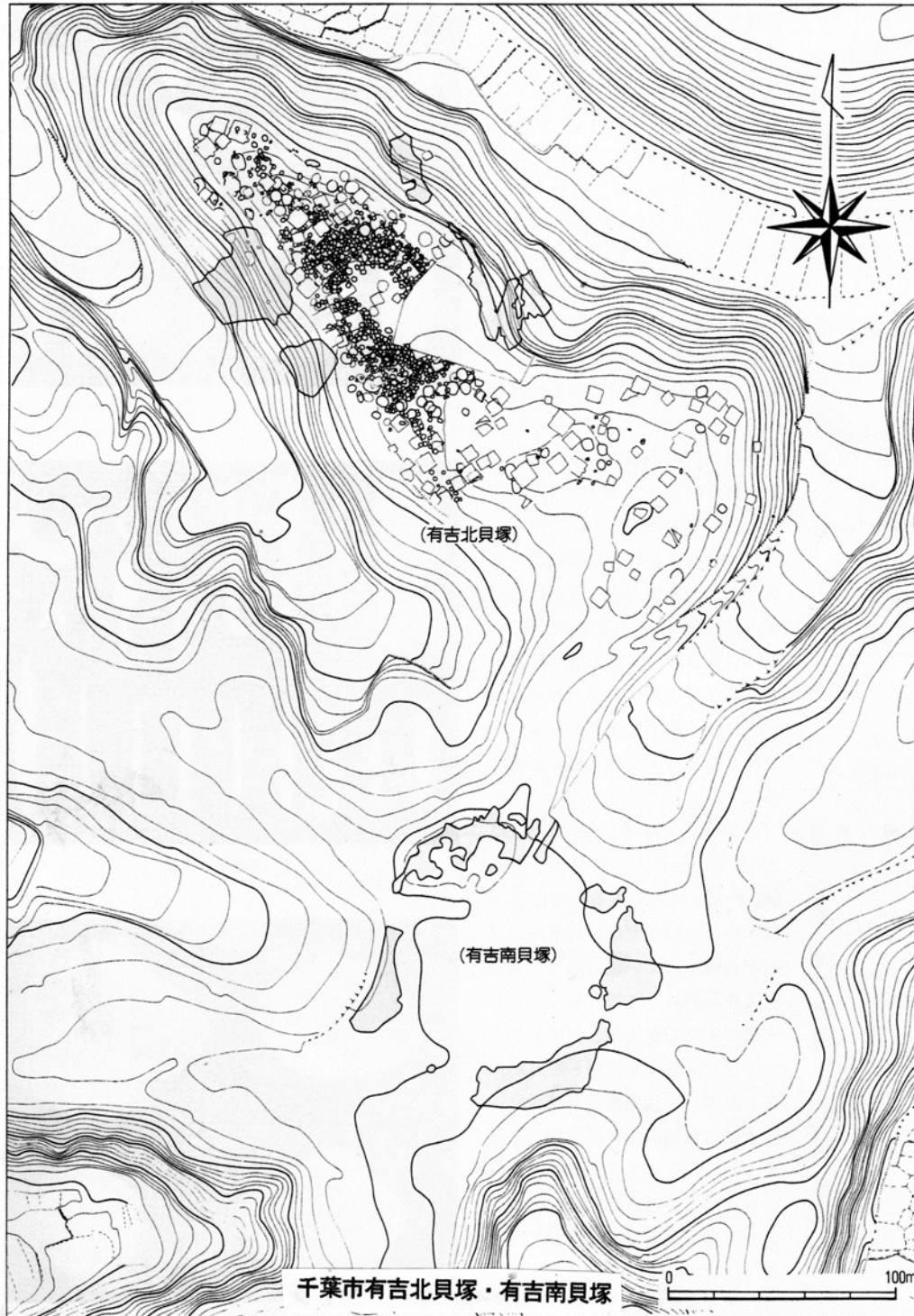
奥東京湾水系

(5) 流山市中野久木谷頭遺跡 (図1、表1-5)

遺跡は、現在の江戸川左岸、奥東京湾に解析された支谷に面した標高約17～20mの舌状台地上に位置す

る。東武アーバンラインの江戸川台駅から西に約600mの距離である。

本遺跡の調査は、昭和59年（1984年）に宅地造成に伴い5,780㎡の調査が、昭和62年（1987年）に東京電力による変電所建設に伴い775㎡の調査が、さらに、平成7年（1995年）1月～翌年の5月に宅地造成



西野雅人 2000『150 有吉北貝塚「千葉県歴史資料」 考古1（旧石器・縄文時代）』千葉県を改変して転載

図2 房総の主な環状集落（2）

に伴いC地点、29,500㎡の調査が行われた。

3回の調査の結果、縄文時代中期の住居跡195軒、フラスコ状小竪穴等を含む小竪穴を中心とした土坑1,065基の遺構や、多様な遺物が出土している。

フラスコ状土坑は土坑全体の26%を占め、また、覆土中から炭化したクルミを出土する例も多いとされ、貝層は23軒の住居跡、19基の土坑に確認されている。

生産関係の遺物は、3回の調査とも一部のみの報告であり数量は不明である。なお、昭和59年（1984）の調査では黒曜石とチャートの薄片608点や石鏃が、さらに土器片錘が250点以上出土しているとのことである。

古鬼怒湾水系

（6）柏市小山台遺跡（図3、表1-6・7）

遺跡は、つくばエクスプレスの柏たなか駅のほぼ南東約400m、古鬼怒湾に開析された支谷を北に臨む台地上に位置している。

発掘調査は、平成11年（1999年）9月～平成29年（2017年）2月までの長期間にわたり、102,341㎡について行われ、多数の竪穴住居跡や小竪穴等の土坑、遺物が確認されている。

調査では確認された2か所の環状集落を一括して報告しているが、ここでは住居跡及び小竪穴からなる環状集落を、その分布状況から以下のように、（6）（北）集落（調査で区分されたエリア1・2・3・4）、（7）（南）集落（同様に区分されたエリア7・8・11・12）に区分して述べることにする。

区分して整理した遺構数の結果は、小山台遺跡（北）集落では、中期の竪穴住居跡195軒、小竪穴や土坑等479基、同（南）集落では中期の竪穴住居跡184軒、小竪穴等862基であった。

また、これらの両集落に属する生産関係及び精神的遺物は以下のとおりである。

（北）集落では、土器片錘1,553点、石製品では石鏃198点、打製石斧168点、磨製石斧110点、であり、（南）集落では土器片錘1,872点、石鏃639点、打製石斧249点、磨製石斧202点であった。また、精神的遺物としては、（北）集落では大珠1点、後期と推定されているものを含むと2点、石棒4点が、（南）集落では大珠7点、土偶1点、石棒1点が出土している。

（7）柏市大松遺跡（図3、表1-8）

ここで紹介する柏市大松遺跡は、小山台遺跡の（北）集落・（南）集落と、生産・精神活動を含む日常生活において、密接な関係を持った環状集落として捉える必要がある。

遺跡は、現在のつくばエクスプレスの柏たなか駅の場所周辺で、地形的には現在の利根川から約1.5kmの距離で、南東に突き出した標高13m～18mの舌状台地上に位置し、谷を挟んだ200m南対岸には小山台遺跡が所在する。

調査は、平成13年（2001年）～同14年（2002年）にかけて、柏北部東地区における財団法人都市整備機構の区画整理事業に伴い行われた。

調査の結果、縄文時代中期、前期等の竪穴住居跡等が多数検出され、その内中期の竪穴住居跡86軒、小竪穴等232基が検出され、出土した生産関係の石製品では石鏃160点、打製石斧67、磨製石斧85点、土製品では土器片錘約1,657点等がある。なお、精神的遺物として、報告書では前期と推定されている大珠が1点出土している。

先にも触れたとおり、大松遺跡の集落と小山台遺跡の（南）・（北）集落は密接な関係で共存していた小

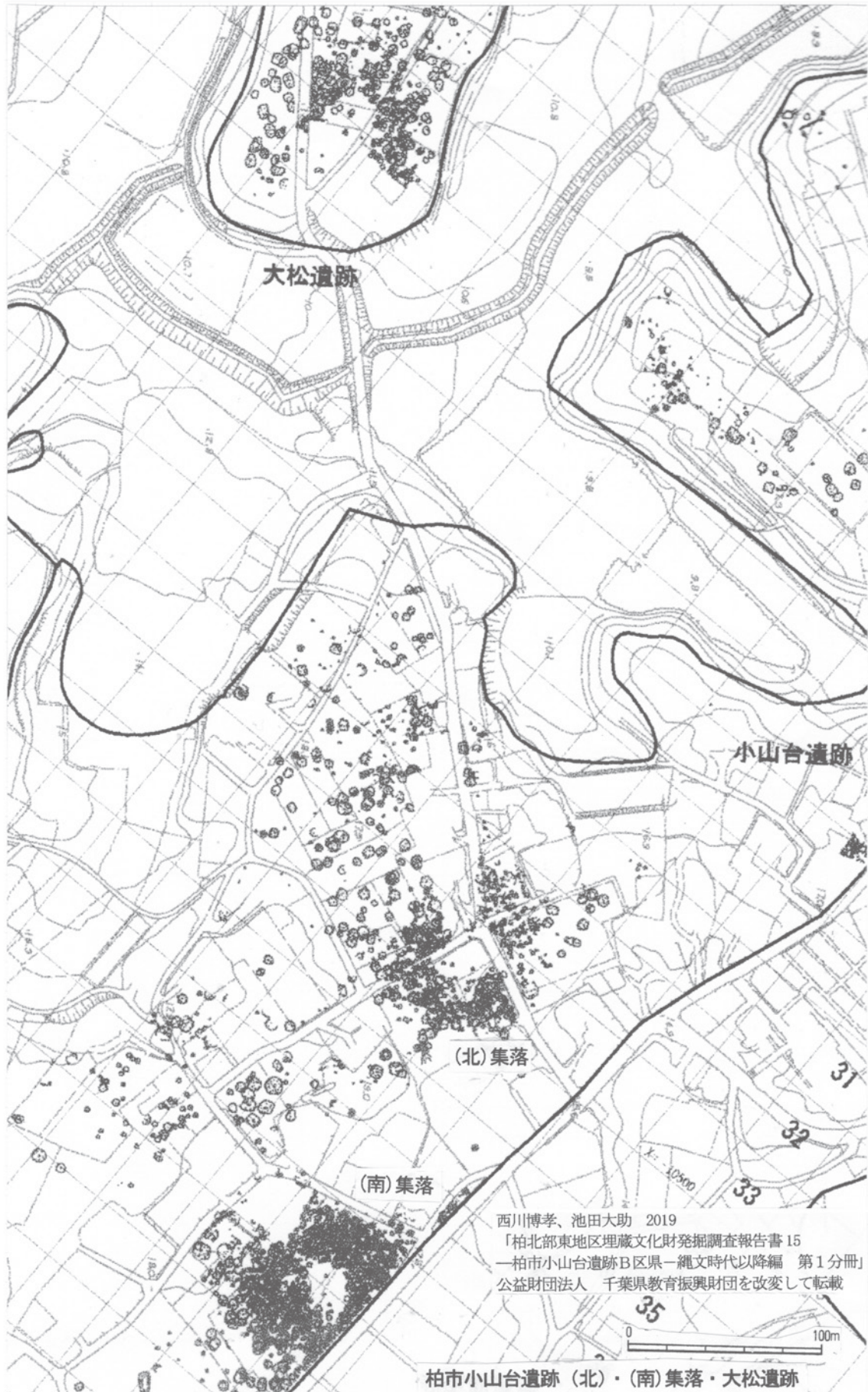


図3 房総の主な環状集落(3)

山台・大松環状集落群であったことが考えられる。

(8) 群馬県赤城村三原田遺跡 (図4、表1-9)

遺跡は、勢多郡赤城村 (現渋川市赤城町)、JR上越線渋川駅の北東約3kmに所在し、赤城山西麓の標高283mの台地上に立地している。

調査は、県営住宅団地建設に伴い、昭和47年 (1972年) 7～8月にかけての予備調査に引き続き、昭和49 (1973年) 年2月まで縄文時代集落跡全域の調査を行った。

調査の結果、前期黒浜式～後期堀之内式期までの住居跡333軒、ピット・土坑等約4,000基、配石遺構1基等が検出され、特に中期前葉～後期初頭までの住居跡は環状に分布していた。また、これらに伴う多量の土器、石器が出土しているが、生産関係遺物では打製石斧1,434点、精神的遺物は石棒17点、大珠4点などが出土している。

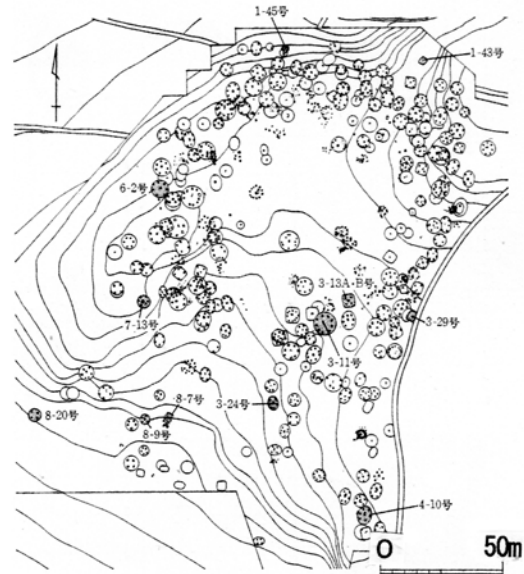


図4 群馬県三原田遺跡遺構分布図

以上、主な全面に近い発掘調査が行われた縄文時代中期の環状集落の概要を述べてきたが、これら以外にも古鬼怒湾水系では大柴町稲荷山遺跡、香取市大根磯花遺跡等も調査されている。また、千葉市加曽利貝塚、市川市姥山貝塚等は史跡に指定されおり、調査が行われたのは一部の区域であることから、今回は省略させていただいた。

2 縄文時代中期環状集落の全面調査による成果と課題

県内外の中期環状集落の事例を紹介してきたが、それらを踏まえ、幾つかの成果・課題について考古学的視点から考えてみたい。

環状に住居跡が分布する集落が見られるのは、柏市大松遺跡の前期関山式土器の時期に、また、黒浜式土器を出土した我孫子市柴崎遺跡等に見られる。しかし、これらの時期では一般的な集落の形状ではなく、前期中葉黒浜式期～後葉浮島式・諸磯式期の船橋市飯山満東遺跡や四街道市木戸先遺跡、そして近年大規模調査が行われた柏北部東地区の富士見・駒形遺跡等では住居跡が散在する状況であり、基本的集落形態として環状を呈するのは中期前葉から後葉にかけてからである。

多くの環状集落の全面、或いはそれに近い発掘調査により、部分的な調査では把握しきれない多くの成果が得られているが、比例して多くの疑問点も現れている。

類似した縄文時代中期環状集落の様相を多面的に比較することが可能となった現在、縄文時代中期社会の解明に向けた端緒となる段階へと進んでいると思われる。

ここでは、ほぼ全域が調査された環状集落の検討をとおして、環状集落の形態と規模の違いが何故生じたのか、そして使用された石器等生産関係遺物の組成、数量的相違が意味すること、また、付属施設、特に小竪穴等について考えて行きたい。

(1) 環状集落の形態と構成

縄文時代中期の環状集落とは、発掘調査の結果、竪穴住居跡がドーナツ状、馬蹄形に分布していた集落跡で、住居跡群とともにこれらに接した小竪穴群が存在している。

また、中期環状集落の分布は、房総地域全体に分布するのではなく、房総半島南部及び外房地域には、地形的な影響か、調査が及んでいないためか、或いは異なった文化の影響なのか、現状では確認できない。

環状集落の分布

横芝光町（旧横芝町）東長山野遺跡は中期前葉～後葉に至る集落跡であるが、竪穴住居群及び小竪穴は主に東側緩斜面の谷津頭を囲むように分布している。東長山野遺跡は九十九里平野のほぼ中央部、栗山川右岸の標高約30～40mの丘陵上に立地している（図5）。

調査の結果、中期前葉～後葉に至る竪穴住居跡が42軒、フラスコ状を含む小竪穴が住居跡群に接した区域に多数確認されているが、環状の形をとる集落ではない。

中期環状集落の県外の状況は、広く広範囲に分布していることが各地の調査例から見ることができる。

山梨県北杜市梅之木遺跡は、八ヶ岳南麓で湯沢川の左岸に立地している中期中葉の井戸尻式～曾利Ⅴ式の時期、特に曾利Ⅱ式～同Ⅳ式の時期に最も多くの住居跡が作られた環状集落遺跡である（図5）。

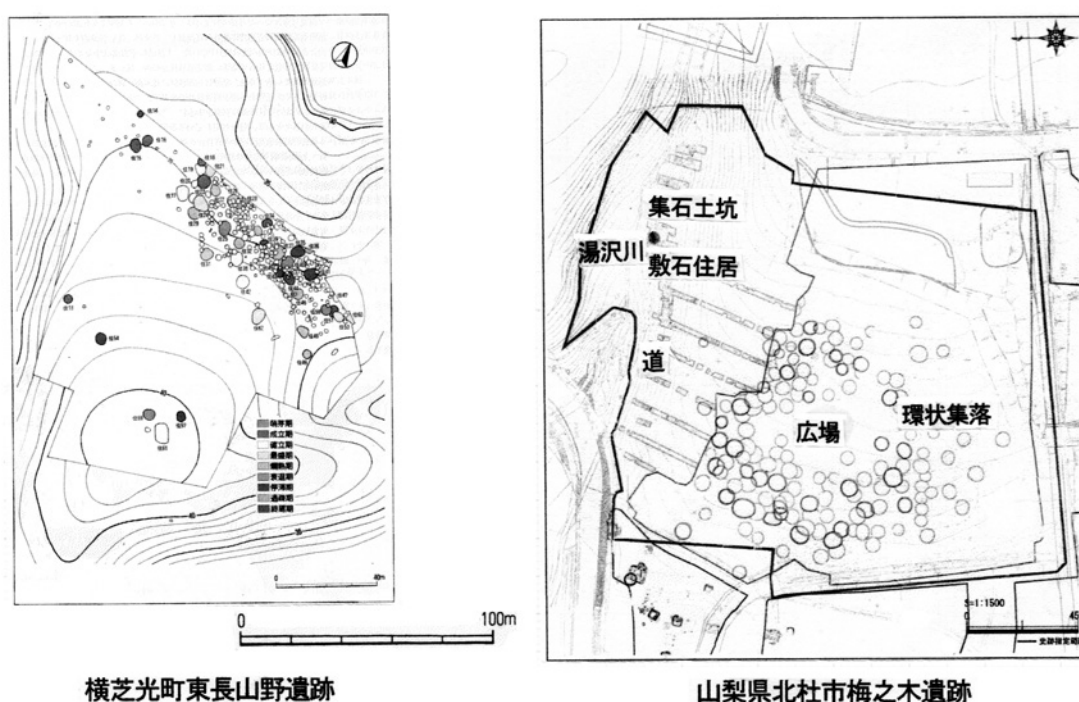


図5 遺構分布図及び集落推定図

史跡に指定された遺跡であるため全堀はされていないが、竪穴住居跡約150軒とこれらに重複して貯蔵穴や墓坑と推測されている土坑が分布している。他に道路状以降や敷石住居跡も確認されている。

西東京市下野谷遺跡は、多摩川や入間川が運んできた奥多摩の山地の礫が堆積してできた広大な扇状地、標高約58mの起伏の少ない平坦な地形に立地している。遺跡は東西約750m、南北約300mの範囲で、東京湾に最終的には注ぐ石神井川の開析した最奥部付近の南側台地上にある。

主な調査としては西東京市教育委員会、早稲田大学等により昭和48年（1973）～令和元年（2019）まで23次に及ぶ調査が行われている。

中期集落に係る以降は、竪穴住居跡約150軒、300～350基の墓坑を含む土坑500基が確認され遺跡は、東西70m、南北50mの範囲で墓と考えられる土坑群が中央部に密集し、それを環状に取り囲むように竪穴住

居群が配置され、さらに掘立柱建物群になると考えられる柱穴群が、環状集落の西側に土坑群と竪穴建物群に挟まれるように細長く半円形に配置されている（図6）。

環状集落の主要な時期を構成するものは中期中葉の勝坂式から中期末葉の加曾利E IV式である。また、生産関係の石器としては、石鏃・磨製石斧・打製石斧等が多数出土している。



図6 西東京市下野谷遺跡
遺構分布図及び集落推定図

この下野谷遺跡では緩やかな谷を挟み東西に、ほぼ同時期に属する環状集落が近接する。土坑を囲む環状の竪穴建物群と、環状集落の西側に土坑群と竪穴建物群に挟まれるように細長く半円形に配置され掘立柱建物群の構造は共通した構造であり、本来両者は下野谷遺跡西集落と東集落という関係性を有した双環状集落と考えられている。また、東集落の規模については西集落を凌ぐものである。

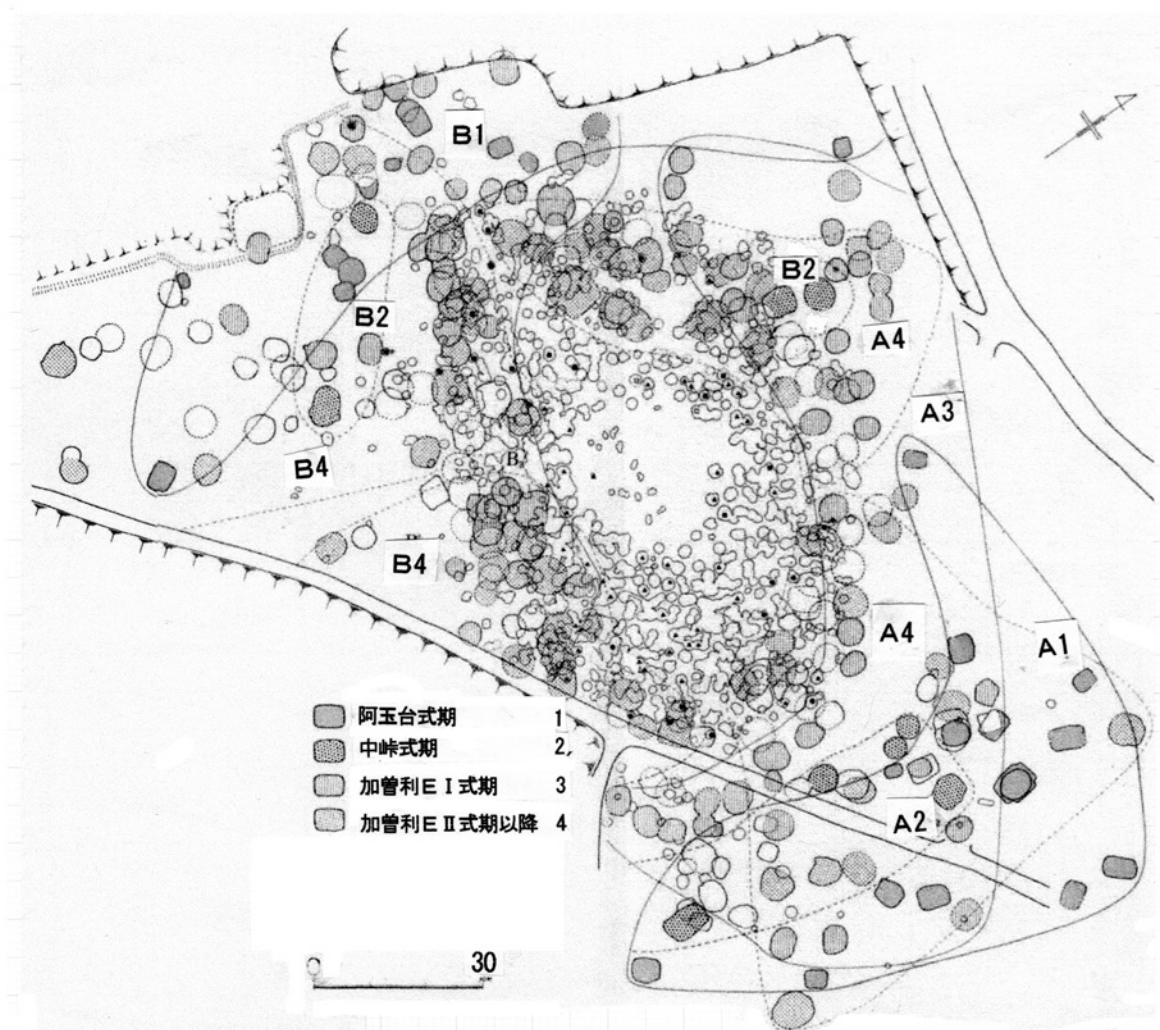
集落における住居群の単位

これまで述べてきた各遺跡の内容から、様々な集落の姿を知ることができるが、ここでは、環状集落を構成する住居跡の数量的違いの意味、環状集落の形の違いの意味等について考えてみる。

筆者はかなり前のことであるが、子和清水遺跡と高根木戸貝塚を比較する中で、以下のような疑問を持ち、検討を加えた。

それは、両遺跡で検出された住居跡群、小竪穴群の分布状態、密度や検出された遺構の数量を比較し、このような差異が何故生じたのかという疑問である。また、子和清水遺跡では約270軒の竪穴住居跡、約1,000基の小竪穴が、中期の初頭と末葉を除く全時期をとおして存続したが、どのように住居を作り替え、集落内を移動して環状を形作ったか、等である。

まず、両遺跡の遺構分布図の観察により、分布の濃淡は明らかであるが、子和清水遺跡では環状集落の一部に僅かに遺構分布が希薄な部分の存在が見られ、住居跡群が二つの大グループ、仮にA、Bに分割が可能であると推測した。さらに、時期不明の竪穴住居跡も多い状態であったが、両グループの竪穴住居跡の、各時期に形成した竪穴住居跡の時期的分布を見るため、土器型式毎に大きな枠、すなわち阿玉台式・中峠式・加曾利E I 式・同II式の4期（1～4）に分類して分布状態を検討した。このグルーピングを行ったところ、両グループ内に、時期ごとの各時期それぞれの集中区域（A1、B4等）が存在し、時期毎に環状内を移動している様子を見ることができた。（図7）



清藤一順 1977『縄文時代集落の成立と展開-国分谷周辺区域における前期、中期を中心として-「考古学から見た房総文化の解明 2 縄文時代」』竿団法人千葉県文化財センターを改変して転載

図7 子和清水遺跡時期別竪穴住居跡群分布図

この大小（A・B、1～4）の具体的なグルーピングはあくまでもひとつの見方であるが、環状集落の大小を理解する上での考え方のひとつの仮説の根拠として、複数集団による環状集落のあり方、集落内における最小単位の移動を推測したのである。

子和清水遺跡と高根木戸貝塚については、構成された竪穴住居の軒数、付属施設（ここでは小竪穴）の数により、子和清水遺跡では2グループの単位集団が時期ごとに移り住んでいる状態が見られると考えた。また、両遺跡の遺構数の差から集落の内容が異なると思われ、高根木戸遺跡は単一の単位集団、子和清水遺跡は複数の単位集団による集落と考えた。また、環状集落ではないが横芝光町東長山野遺跡は規模、分布からも単一集団による集落であったのだろう。

高根木戸貝塚と子和清水遺跡の両遺跡の比較に限らず、今日では表1のとおり、200軒、300軒の竪穴住居跡による集落もあれば100軒に満たない集落が存在するが、何に起因しているのだろうか。

表1を見ると、竪穴住居跡の最少は高根木戸貝塚の75軒、次に大松遺跡の86軒であり、200軒弱の軒数に有吉北貝塚、小山台遺跡の（南）・（北）集落、中野久木谷頭遺跡が続いている。そして、県内最多の軒数は300軒の草刈貝塚、278軒の子和清水遺跡がこれにつづく。なお、群馬県の三原田遺跡は333軒で、表に掲載した遺跡の中で住居跡の軒数は最も多い。

これらの、最少の高根木戸貝塚と最多の草刈貝塚では約4倍の住居軒数であり、その理由として単純に多産系の集団か否か、人々が偶然的に寄り集まった違い等ではなく、それぞれの集落が存立し継続可能な経済活動を維持する目的で、さらに、個々の集落を越えた社会的関係を形成していくために適正な規模を求めた必然であったと考えられるのである。

図1～図4で、いくつかの環状集落について紹介したが、これらの平面形状及び規模が、いずれも相似しており、環状に分布した竪穴住居群の中心が約100m～200m前後の直径を中心に集落が形成され、全体図を重ねるとほぼ同様の状態が観察できる。今回は詳細に分析しないが、縄文時代中期の環状集落で、人々が集落内の日常生活や精神生活において、集団が単一、複数にかかわらず、この程度の空間が合理的であったことから、この規模の環状集落がひとつの単位として広く認識されていたことも考えられる。様々な情報伝達や精神的行事に適当な広さであったのであろうか。

環状集落群の形成

各集落の物質的、精神的な存続を保障する各地域における経済活動が、単一集団でも果たせるのか、それとも複数の集団の集合を必要とするのかが、上記した集落単位での、竪穴住居跡の数を決定していたと推測させるものである。

集団の集合は、より多くの竪穴住居跡の環状集落を形成した。ひとつの環状集落に、効率的な日常生活、情報交換などが可能な範囲であれば、複数集団の存在できたのであろう。しかし、さらに多くの集団が必要となった状況、すなわちひとつの環状集落では存立できない経済的状況等が生じた場合には、新たな環状集落の形成が求められ、房総や先に触れた武蔵野台地でも出現することとなったのであろう。

今日では、房総では柏市小山台遺跡・大松遺跡、千葉市有吉北貝塚と有吉南貝塚のように多くの住居跡群を持つ遺跡、環状集落が近接して存在することが知られ、また、県外では東京都西東京市下野谷遺跡等で、双環状集落として呼称されている。一定の環境をテリトリーとする縄文時代集落のあり方、当時の社会状況を再検討する必要性が生じることとなってきた。

県内の有吉北貝塚・有吉南貝塚や、西東京市下野谷遺跡は双環状集落と言われているが、小山台遺跡と

大松遺跡は、小山台遺跡の（南）・（北）集落と「大松集落」の3集落によって形成された環状集落群であり、双環状集落という名称も検討すべきかも知れない。環状集落群は、単一或いは複数の集団による環状集落が複数存在し形成されている。今後の検討課題である。

縄文時代集落の立地は、各集落間には数km或いは台地ごとにテリトリーが存在し、特に環状集落が近接して存在することは筆者も含めあり得ないと考えられてきた。しかし、今回紹介した例からも各集落を中心とした距離、地形等による自給自足のためのテリトリーは再検討する必要があると思われる。

生産関係遺物や精神的遺物の出土内容から、日常的食料等の集落間での融通を行っていたことが考えられるのである。

（2）生産関係遺物等からの集落の役割

生産関係遺物の出土状況

縄文時代集落を構成する人々にとって、生命・生活の維持・発展を獲得するために、様々な土製品・石製品等が作られた。それらは精神・肉体の維持にとって必要以上に不可欠な道具であり、石製品・土製品の内容・組成等を見ることにより、その集落の主たる生業、人々の暮らしを明らかにできると考えられる。

すなわち、各遺跡の発掘調査から出土した生産関係の遺物により、どのような生業が中心に行われていたのか、また、精神的遺物の出土量により人々の繋がりが、いかに図られたのかを探る事ができると考えられるのである。

表2は、先に紹介した環状集落ごとに出土した生産関係遺物と精神的遺物の一部を摘出し、各遺跡の数量を比較することにより、各集落の経済・精神活動の特性を探ろうとしたものである。なお、現在の発掘調査は、自然の力、人為的等の要因から表土付近が攪乱を受けており、当時の状態をとどめていないため、重機により除去していることから、かつて存在した遺跡内のすべての遺物を確認できないという限界がある事を前提としていることを蛇足ながら付け加えておく。

生産関係の石製品として取り上げたのは、石鏃、打製石斧、磨製石斧、土製品では土錘等、狩猟、漁労、採集という生産活動に使用した代表的な生活用具である。各遺跡の点数については、一部の報告書では出土した全点数が記載されていないため、報告されていた数量・分類を極力記載しているが、傾向を知ることができる程度のものもある。

なお、土器片錘とセットで浮子と考えられている「軽石製品」は、実験等によっても浮子としての機能を果たしていないものも多数あること、前期に顕著なヤスリ的な機能が考えられることや垂飾品としての役割も考えられること、内陸に近い遺跡の土器片錘の出土量から、浮子を必要としないと思われる漁網を用いた投網漁の利用が推測される事等から、生産関係遺物からは除外した。

また、精神的遺物は、石棒、土偶、大珠についてのみ取り上げている。

石製品の用途として、一般的に認知されていると思われることは、石鏃は弓矢のヤジリとして狩猟に、磨製石斧は樹木の伐採・加工用、そして打製石斧は植物の採集のほか、木材や骨角製品等の加工に使用され、土製品の土器片錘は漁網等の網を水中に沈める錘として考えられている。

石器等の出土量比較

表2に則して各遺跡における石製品等の出土量を比較し考えてみる。表には、住居跡1軒に対する各遺物の数量を参考までに記したが、単純な集落ごとの数量比較は、集落規模による数量の差が生じると思われること、また、住居跡1軒あたりの数量比較による方が、各集落での各石製品・土製品の必要性の比重

表2 主要環状集落における主な生産・精神関係遺物数

遺跡名	竪穴住居跡	石鏃	打製石斧			磨製石斧	土器片錘	その他	大珠	土偶	石棒
			撥形	分銅形	短冊形						
船橋市 高根木戸貝塚	75	80(1.1)	115(1.5)			50 (0.7)	約 2,000(26.7)	骨製刺突具 2	1	0	0
			38(0.5)	26(0.3)	31(0.4)						
松戸市 子和清水遺跡	278	347(1.2)	558(2.0)			108 (0.4)	862(3.1)	骨製刺突具 1、骨鏃1	1	1	0
			145(0.5)	103(0.4)	45(0.2)						
千葉市 有吉北貝塚	168	1,088(6.5)	833(5.0)			310 (1.8)	5,354(31.9)	鈎針6、骨鏃 7、刺突具 71	1	0	4
			20(0.1)	64(0.4)	29(0.2)						
市原市 草刈貝塚	約300	103(0.3)	458(1.5)			103 (0.3)	2,403(8.0)	骨製刺突具 6、石錘3	2	0	0
			24(0.1)	28(0.1)	406(1.4)						
柏市 小山台遺跡(北)	195	198(1.0)	168(0.9)			110 (0.6)	1,553(8.0)		1	2(後期 含む?)	4
			11	13	9						
柏市 小山台遺跡(南)	184	639(3.5)	249(1.4)			202 (1.1)	1,872(10.2)		7	1	1
			11	64	30						
柏市 大松遺跡	86	115(1.3)	68(0.8)			87 (1.0)	1,929(22.4)	石錘3	1(前 期?)	0	0
			34(0.4)	2(0)	10(0.1)						
群馬県渋川市 三原田遺跡	333	91(0.3)	1,434(4.3)			4(0)	0	石錘4	4	0	17
			499(1.5)	31(0.1)	249(0.7)						

※1 () 内は住居跡1軒あたりの数量

※2 生産関係の遺物点数は、以下の資料による。

高根木戸貝塚	報告書の挿図を筆者分類	小山台遺跡	報告書の第22・23表から
子和清水遺跡	報告書記載の挿図を筆者分類	大松遺跡	報告書第8・9表、挿図を筆者分類
有吉北貝塚	報告書記載の第8表から	三原田遺跡	『V 三原田遺跡出土機種別全石器「三原田遺跡第2巻(中期前半期～後半初頭期篇)」』『IV-3 三原田遺跡における打製石斧の形状の変化「三原田遺跡第3巻(中期後半期～後期初頭期篇)」』
草刈貝塚	報告書記載の表1・2から		

が判断できると考えたからである。なお、1軒の所有した数量を求めることを目的としてはいない。

土器片錘は有吉北貝塚の5,354(31.9)が最も多く、最少は子和清水遺跡862(3.1)である。両遺跡の海浜部、内陸部という地形的環境を考慮すれば納得できる差である。しかし、有吉北貝塚に比較的近い位置関係にある草刈貝塚では2,403(8.0)と1軒あたりの数は有吉北貝塚の約25%で、一面的ではあるが漁撈への積極性の違いが現れている。

石鏃の出土量の最多は有吉北貝塚の1,088(6.5)で、続いては小山台遺跡(南)集落の639(3.5)であり、最少は出土点数が高根木戸貝塚の80(1.1)であるが、住居跡の数量に比べて最も少ないのは草刈貝塚の103(0.3)であり、有吉北貝塚と比較すると、石鏃、土器片錘からは狩猟、漁撈には消極的であることがわかれる。

有吉北貝塚の石鏃点数からは、積極的な狩猟活動がうかがえるが、比較的大規模な貝層を有し貝の捕獲や骨角製刺突具の出土に見られるとおり、漁撈への積極的関わりも見られることから、魚類の捕獲に刺突具として利用したことも考えられる。最少は草刈貝塚の103(0.3)で、表1のように、約300軒という県内では最も多い住居跡の集落の経済活動は、どのようなものであったのであろうか。また、積極的狩猟が想定された三原田遺跡は僅か91(0.3)であり、弓矢を使用しない狩猟法、狩猟以外の方法での動物の捕獲等や他の集落との交流も考えられる。

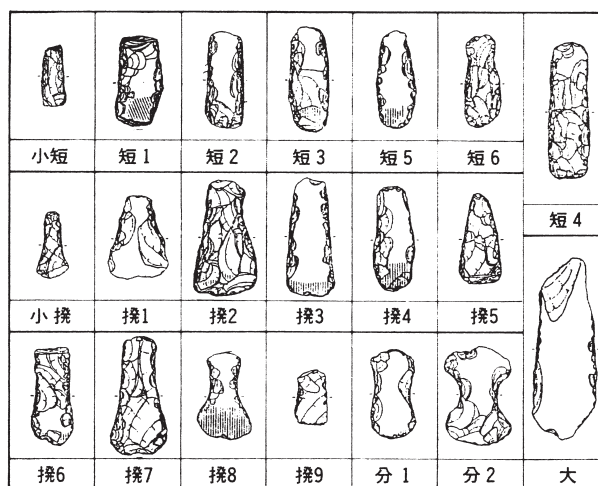
また、小山台遺跡、大松遺跡の3集落を比較すると、(南)集落が639(3.5)であるのに対し、(北)集

落は198 (1.8)、大松遺跡は115 (1.3) と (南) 集落の比率は他の 2 集落の 2 倍以上であり、石鏃未製品の出土量に至っては (北) 集落では91点、大松集落では186点であるのに対して、(南) 集落では1,140点であり、3 集落内での石鏃製作作業の集落間の役割、また、主たる生産活動の相違等を考えることができる。

磨製石斧は住居の建築資材、丸木舟の材料等の伐採、加工に使用されたと考えられているが、有吉北貝塚の310 (1.8) が最多であり、最少は草刈貝塚の103 (0.3) である。なお、三原田遺跡では 4 点と極めて少ない出土量である。

打製石斧の分類

生産関係の主たる道具としてある打製石斧の細分は、撥形、短冊形、分銅形の 3 区分が一般的であり、主な用途として、明確な使い分けはなかったと思われるが、撥形は比較的大きな木材の枝払いや加工、大形動物の解体等が、分銅形は小さな木材の加工や動物の裁断等、そして短冊形は柄の先端に装着して鋤や鍬のように使用し根菜類を得た土堀具としてが主な用途と考えられている。これらの形状には中間形も存在するが、ここでは各報告書に記載されている分類を最優先に、分類されていない遺跡に関しては三原田遺跡の分類 (図 8) を基準に、筆者が以下のように大枠を設定し定義し、分類した。



小宮俊久 1990 『V 三原田遺跡出土機種別全石器「三原田遺跡第 2 卷 (中期前半期～後半初頭期篇)」』群馬県企業局から転載

図 8 三原田遺跡出土打製石斧分類図

撥形は、基本は片側に刃部が、基部は刃部よりは短くやや直線的、丸み或いは尖らせているものである。短冊形は、文字通り平面形が短冊に類似した長方形に近い形状のもので、やや胴部が膨らみをもつ曲線的なものもある。

分銅形は胴部に抉り部を持つもので、両端部に刃部が作られているものもあるが片方だけのものや、抉りも極めて小さいものもある。なお、図 8 の三原田遺跡における「撿 8」は、県内の他の遺跡では分銅形に含めたものもある。

生産関係遺物の組成

各遺跡における打製石斧の点数は表 2 のとおりであるが、小山台遺跡の打製石斧については、3 分類された点数が少なく、不明なものが多いことから 1 軒あたりの数量は算出しなかった。

打製石斧の数量が県内で最も多いのは有吉北貝塚の 833 (5.0) で、続く子和清水遺跡の 558 (2.0)、草刈貝塚の 483 (1.5) 等と大きな差がある。三原田遺跡は 1,434 (4.34) で遺跡全体からの出土数は多いが、1 軒あたりでは有吉北貝塚よりは少ない。

また、県内の集落で 3 分類できた点数では、最も多いのは短冊形 560 点で、以下分銅形 300 点、撥形 283 点である。

短冊形の県内集落出土数は打製石斧の中では最も多い。その中で最も多いのは草刈貝塚の 406 (1.4) で、最も少ないのは子和清水遺跡 45 (0.2)、有吉北貝塚 29 (0.2) である。草刈貝塚では短冊形は他の集落より多い出土である一方、撥形、分銅形では最少の出土点数である。

打製石斧中分銅形は、表2の県内集落では出土量2番目の多さで、子和清水遺跡では103(0.4)、有吉北貝塚64(0.4)が多い集落で、草刈貝塚は28(0.1)で最も少ない集落である。有吉北貝塚は分銅形が3種類のなかで最も多い出土量である。

なお、詳細には記載しなかった小山台遺跡群の3集落では、(南)集落が圧倒的に分銅形の数量が多いことが判る。

撥形は県内出土の3分類された中では最も少ない出土量で、子和清水遺跡が140(0.5)と最も多く、有吉北貝塚20(0.1)、草刈貝塚24(0.1)が最も少ない。三原田遺跡は撥形が他の器形より圧倒的に多く499(1.5)で、房総の環状集落とは大きな違いがある。

磨製石斧は有吉北貝塚の310(1.8)が最多、子和清水遺跡108(0.4)、草刈貝塚の103(0.3)が最少である。

これらのように、磨製・3種の打製石斧等の出土数、比率は各遺跡により個性が見られ、その原因、生産活動の相違を明らかにする上でも、その用途の更なる解明が期待される。

現状では唯一の生産関係の土製品として土器片錘があるが、1軒あたり出土の最多は高根木戸貝塚の約2,000(26.7)、遺跡全体の出土数では草刈貝塚2,403(8.0)であり、最少は子和清水遺跡の862(3.1)である。海浜部、内陸部の地形的環境を反映していると思われ、浜辺、河川等の環境を利用した魚類等の捕獲は、有吉北貝塚等から出土した骨角製の刺突具等と併せて利用し、積極的に行われていたことがうかがわれる。

ここで、各遺跡における石鏃、打製石斧、土器片錘の出土した内訳から、現在一般的に考えられる打製石斧それぞれの用途をもとに、幾つかの集落の主な生産活動を推測する。

有吉北貝塚は石鏃、磨製石斧、土器片錘そして分銅形打製石斧の出土量は最多であり、この地域において狩猟、漁労等の生産活動を積極的に行っていた集落である。比較的近い距離にあって、各遺物の出土量が相対的に少ない草刈貝塚とは正反対とも言える集落である。

草刈貝塚は石鏃、土器片錘等の漁撈、狩猟関係の道具が少ないことに反して、掘ることに用いたとされる短冊形が多く、有吉北貝塚や他の遺跡と比べ圧倒的に多いことは、掘ることにより植物の根菜等を得ていたことが主要な生産活動であったことを推測させる。

子和清水遺跡は、東京湾が市川市から延びた国分谷の最奥部に位置する環状集落で、撥形、分銅形の打製石斧は掲載した集落の中では多いが、短冊形打製石斧、土器片錘がやや少なく、採集、漁労には相対的に消極的であったのであろうか。

撥形は、漁撈に積極的な有吉北貝塚、根菜類の採集に積極的な草刈貝塚では少なく、三原田遺跡では房総と異なる出土数である事はどのような用途があったのであろうか。

柏市の3集落では、有吉北貝塚に次いで各種の生産関係遺物の出土量が確認でき、中でも小山台遺跡(南)集落が出土量から3集落の中心的位置にあったこと、特に石鏃が極めて多い出土量からも推測できる。

精神遺物の出土

人々の安心・安全を祈る中期の精神的遺物としては、大珠、石棒等の石製品や土偶等の土製品があげられる。出土例が少ないことから深く検討することはできないが、大珠については、主要集落に少数出土するという今日では一般化されている事例を、改めて追加・提供していると言える。

小山台集落群の3か所の集落の大珠の例を見ると、(南)集落が7点、(北)集落及び大松遺跡各1点であり、3集落が集合した精神的行事は(南)集落が中心となって執り行われたのであろうか。また、石棒

は（北）集落で4点出土しているのに対して、（南）集落は1点であり、精神的行事の目的により両集落で分担していたのであろうか。これらの精神的遺物の出土状況は、環状集落群と環状集落個別の精神的行為が存在したことを考えさせる。

（3）小竪穴の再認識

縄文時代中期環状集落と小竪穴

房総の縄文時代中期の環状集落に、竪穴住居跡群の内側に隣接して必ず設けられる施設として、小竪穴という一種の土坑が確認されることは、環状集落の全域に及ぶ調査が行われるようになって以降、約半世紀前から知られるようになってきた。そして、今日でも、報告書や論文等で「小竪穴」という名称を使用している一方で、「土坑」として一括して扱われていることも多い。「土坑」という名称は、時期に限定されず、必要に応じ、場所にこだわらず、不定形な形で地面を掘って使用した多目的施設跡の総称である。

それに対して小竪穴は、時期的には中期に限定され、場所は中期集落の竪穴住居跡に隣接して設けられ、断面・平面形は幾つかの規則的な形状で設けられており、使用目的は未だ解決されていないが、一般的に用いられている土坑という名称とは区別されるべきである。縄文時代中期の環状集落は、竪穴住居跡群とともに小竪穴が設けられることにより成立していることから、集落の構造的な理解に関する解明にとって、この認識を改める必要がある。各種土坑から、小竪穴を区分し、小竪穴の集落内における意味を明確にするために整理していきたい。

表1において、主要な環状集落の竪穴住居の軒数と小竪穴と一般的な土坑の基数を記載した。先に触れたとおり、報告書では小竪穴と土坑の基数は両者が混在している数であるため、小竪穴の正確な数は明らかにできなかった。ただし、有吉北貝塚は報告後に土坑と区別し、小竪穴の実数を算出されている。

はじめに、小竪穴に関しての定義を以下のとおり整理しておく。先に述べたように小竪穴とは、縄文時代中期の集落で、竪穴住居跡に近接して設けられる土坑の一種であり、いくつかの平面形・断面形を呈するが、底径は約1.5～2m前後が多く、深さは遺構確認面や土層の堆積状態から差異もあるが約1～1.5m前後のものが多い。また、遺構の断面形状はフラスコ状或いは円筒状で、平面形は円形基調で不整形のものも見られる。平面形が円形・長円形で底面が緩い傾斜を呈した、いわゆる一般的に称されている土坑とは区別されるものである。

小竪穴の分類

縄文時代中期の集落に付随した施設、小竪穴を一般的な土坑と区別するために、小竪穴について以下のとおり分類し、中期集落特有の施設を含め、集落の構造、特性を探る手立てとしたい。

I～IV類は主に形状から、A～Eは小竪穴内部のピットの位置、数量、規模等により分類した。

I類 底面から壁が内傾して立ち上がり、上部で最小径となり地表に向かいやや開くもので、オーバーハングした壁断面で、フラスコ状の形状を呈するのが特徴である。

II類 底面からほぼ垂直に立ち上がる壁面を持つ茶筒状のもので、中期の小竪穴で最も多い。

III類 壁は底面からほぼ垂直に立ち上がるが、平面形が円形ではなく、内側に張出しをもちハート形のような平面形を呈する。

IV類 II類と形状は同じで平面形は円形であるが、直径は約1m程度で相対的に小形である。出土する土器の状態、竪穴住居跡に隣接している小竪穴群を形成していることから小竪穴に含めた。

また、上記の4種類に付属したピットの有無、位置、大小等により、以下のような特性が見られる。

A種 底面にピット等が見られず底面が平滑なもの

B種 底面部の中心付近に、屋根や覆い、昇降具の設置に関係した常設的な細い柱を立てたと考えられるピットが掘られたもの

C種 壁際等の底面に径30cm以上のピットが掘られたもの

D種 上記のB、C種のピット双方がみられるもの

その他、底面に複数の深さが浅い・深いピットが散在しているものもあるが、小竪穴に意図的、計画的に設けたものではなく偶然にできたと思われることから分類しなかった。

図9は分類に基づき、いくつかの遺跡で確認された小竪穴を分類した図である。

1は、大松遺跡SK-096の底面に、直立した状態で深鉢が出土したもので、分類ではI-Aである。遺構確認面が最も括れた部分と思われることから内傾した壁のみが確認されている。

2は、小山台遺跡(53C)SK017ほぼ中心部に、常設の昇降具か開口部を覆う屋根等を支える柱を設置していたと思われる穴が、垂直に掘られていたと推定されるI-Bである。

3は、小山台遺跡の(36)SK181A.191Bを中心とした重複した小竪穴群で、181Aと191Bの接合部付近のピットの帰属を181Aとすると、181AはII-B、181BはII-BまたはC、181DはIV-Dである。

4は子と清水遺跡の小竪穴群の一画で、左から141はIII-B、152はオーバーハングした壁の一部だがI-A、164はIII-A、163はII-Iである。152には伏せた深鉢が、164には横倒しの状態で2個体、壁に寄りかかる状態で1個体の深鉢が確認されている。

5は、子と清水遺跡の小竪穴で、619は確認面では円形の平面形であるが、壁の中程に階段状の中段が設けられているものでIII-D、626はIV-Cである。619には3個体の深鉢が底面から出土したが、1個体は壁に寄りかかる状態で、2個体は伏せられた状態で確認された。

6は、栃木県大田原市(旧那須郡黒羽町)浅香内遺跡で確認されたフラスコ状の小竪穴で、底面には2個体の土器が確認されているI-Aである。

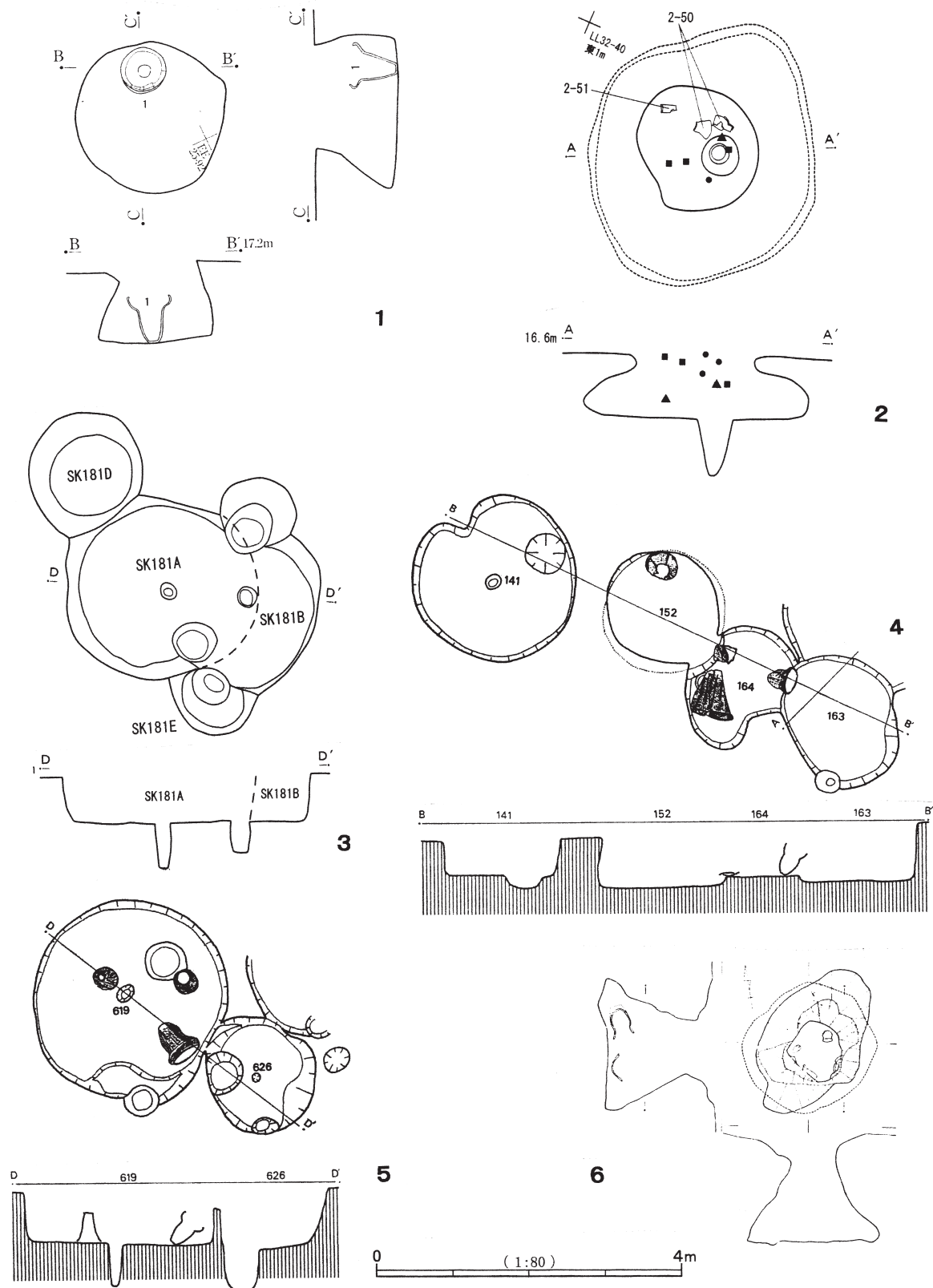
小竪穴を、他のいわゆる土坑と区別するため、小竪穴の形状等により幾つかに分類してきた。

小竪穴の分布

小竪穴の地域的分布を見ると、特徴的な地域性を見ることができる。詳細は本稿で触れないがI類としたフラスコ状のものであるが、その分布は千葉県北部、東京湾東岸地域及び古鬼怒湾水系を中心とした分布が確認される。このフラスコ状は、茨城県土浦市木田余遺跡、栃木県大田原市(旧那須郡黒羽町)浅香内遺跡など北関東地域をはじめ、新潟県塩沢町五丁歩遺跡、福島県二本松市上原A遺跡、宮城県蔵王町谷地遺跡等、広範な地域に確認されている。しかし、埼玉県以西の下野谷遺跡等の地域ではほとんど見られない。阿玉台式・大木式土器圏や、その影響を受けた土器圏等に分布し、勝坂式土器圏及び続く土器群圏内の集落では、フラスコ状の小竪穴はつくられないようである。

小竪穴の機能

小竪穴の用途については、貯蔵施設と考えられるのが一般的となっているのが現状である。しかし、区域が重複する廃屋墓とともに、底面からの少なからぬ人骨の出土例からも墓地としての機能も有していることから、環状集落内に墓域を形成していたことは事実である。貝層が確認された小竪穴の数や竪穴住居跡に比べ人骨の検出例が少なく、集落の一般的構成員の墓域としては考えられないと推定される。一部の特定な人々の墓域として、住居群の居住域に隣接して設けられたのであろうか。



1は「柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書4—柏市大松遺跡B区—縄文時代以降編1」、2・3は「柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書15—柏市小山台遺跡B区—縄文時代以降編」、4・5は「子和清水貝塚 遺構図版編」、6は『27 浅香内遺跡「栃木県史 資料篇考古1 第四章 縄文時代」』から改変・転載

図9 各種の小竪穴

大松遺跡S K-096では、西関東等の地域の文様が施され、また胎土も房総で製作されたとは思えない深鉢が1個体、また、有吉北貝塚S K66Aからも、馬高系と見られる他地域で製作された小形の深鉢がフラスコ形小竪穴から出土している。

子和清水遺跡のフラスコ状小竪穴276号土坑では、副葬された深鉢とともに埋葬人骨が確認されたことから副葬の風習が存在したことは明らかである。底面から土器が出土される小竪穴の中には、副葬された墓坑であった可能性も考えられる。特に、有吉北貝塚、大松遺跡のフラスコ形小竪穴の例は、当該地域との交易で関係の深い者の死に伴い、搬入した土器を副葬したとも考えられる。

いずれにしても、覆土中に炭化粒が多いこと等の一部の例を根拠にした一時的保管ではなく、貯蔵に限定した決めつけは、縄文時代中期の集落の経済活動の理解に影響を及ぼす可能性もあるとも思えることから、中期環状集落における墓制等、多くの視点からの再検証が必要である。表2において、竪穴住居に近接し小竪穴と称される施設が住居跡1軒に対して2.5~5.5基確認されるというデータが得られている（集落中央部が調査されなかった高根木戸貝塚は除く。）が、中期における縄文人にとって、重要な施設であったことを再確認し、正確な根拠の蓄積の上で考えていくべきである。

まとめ

縄文時代中期の環状集落の解明に向けた必要なテーマ、視点は、限りなく多岐にわたり、また多い。

筆者が図らずも一定期間加わることとなった、中期環状集落の全面に近い発掘である子和清水遺跡調査から生じた問題意識と、様々な思いがきっかけで、その一部を取り上げ若干のテーマについて述べてきた。

この約半世紀以上に及ぶ間に調査された環状集落を例に、基本的にはコピーしたような規模と竪穴住居や小竪穴が配置されたような環状集落、一定のきまりがあるような集落の形状でありながら、竪穴住居や小竪穴の数量に関しては大きな違いがあること、そして、複数の環状集落が集合し、環状集落群を形成している事実を考えようとした。

現在のところ、環状集落の基本は効率的な生産活動を求めた社会的な結果であり、環状集落の最小単位は血縁を軸に発展した単位集団であると考えられる。そして各集落の生産活動は、個別集落にとっての十分な収穫物の獲得だけでなく、周辺地域との共存に向けた分業的生産活動の展開であろう。その発展の程度により複数集団による多数の竪穴住居跡の見られる大集落、環状集落が生まれ、さらに多くの集団が必要となる場合には環状集落群が形成されたと考えられるのである。各集団が効果的・合理的な生産活動を求める中での結果と考えていきたい。

各集落における生産関係遺物の組成の相違は、各集落の生産活動の特性を表現すると考え、各環状集落における生産関係遺物、特に石器の組成を分析し、比較することにより各集落の主要な生産活動と集落間の相違、連携を探ろうと試みた。今回は、明確に各集落の主要な具体的生産活動を見いだすことは少なかったが、異なる生産活動を行っていたことは明らかとなった。

その他、幾つかの成果を上げると、まず、各遺跡から、各種の生産関係遺物が数の多少に関わらず出土していることから、すべての集落が最低限の日常的食料を得る作業は行っていたことが証明されたことである。

また、房総北部では、打製石斧のうち短冊形が最も多いことは、採集に対する活動が中心であったのであろうか。それとも他の要因からであろうか。

表2の遺跡での各種遺物の比較により、各集落で生産関係遺物の量に多さにバラツキがみられることから、当然収穫物の内容、多少にも影響したと思われる。

有吉北貝塚と草刈貝塚の、直線距離で約3kmにも満たない両遺跡間で、生産活動の一面であるが有吉北貝塚では漁労への積極性が見られる一方、草刈貝塚では漁撈には消極的であるが根菜類の採集には積極性が認められるという、異なった内容を示す成果が得られている。狭い地域内ではあるが生産に関しての密接な関係、生産物の補完関係が存在していたのであろうか。環状集落群とも言える関係かも知れない。

各遺跡での生産関係遺物の量から考えられる収穫物の違いは、地域における分業の存在を知る手がかりである。これらを理解するためにも、打製石斧3種の用途は、集落間の社会的関係を考える重要な指標であることから、緻密な再検討が必要である。

集落の構成を考える上で、竪穴住居に近接した小竪穴の存在は多くの課題を与えている。大木式土器圏との共通性と勝坂式土器圏との非共通性、集落内墓域と埋葬対象、貯蔵穴であれば何が納められ、どのような生産活動を行っていたのか等多様である。これらの小竪穴を、単なる貯蔵穴、墓穴とするのではなく、集落を構成する一施設として、一般的土坑と区別し考えていく必要を提起したい。

本稿を執筆している中で、一部の情報しか明らかにされていない報告書が多い現状に対して、一石を投じたいとの考えも生じてきた。いくつかの報告書を利用させていただいた。しかし、得たい情報が記載されていないことが多かった。具体的には、出土した遺物の数量、図、表などが掲載されていないものもあった。様々な事情で掲載できないこともあるかも知れないが、図の一部、それぞれの点数の表だけでも少なくとも掲載されるべきである。また、打製石斧は撥形・短冊形・分銅形に分類され、それぞれの用途が推測されているにもかかわらず、報告書に分類されているものは少ない。これから多くの遺跡の調査に関わる方々に、本稿により一言言いたいのは「記録保存」という緊急発掘の意味の再考である。

筆者が松戸市子和清水遺跡の発掘調査に参加してから半世紀以上が過ぎ、当時の調査団長であった岩崎卓也先生をはじめ発掘調査をともした先輩・友人が他界しつつある。見たこともないとなんでもない遺跡に、現在と比べ決して良いとは言えない条件のもと、当時の松戸市社会教育課の関根孝夫先生を中心に、いわゆる「緊急発掘」に疑問を持っていたが故に、周囲に後ろ指を指されない調査をするため、心身ともにがむしゃらに関わったことを思い出す。苦言を呈してきた部分もあるが、主旨は多くの荷物を残してきた自らの自省でもある。

最後に、資料閲覧等での協力をいただいた橋本勝雄氏、千葉県教育振興財団小林清隆氏、挿図の引用をご快諾いただいた小川和博、川根正教、倉田恵津子、古内茂、西野雅人各氏及び千葉県文書館には、記して感謝いたします。

引用文献

挿図で、本文中に転載元を記載していない文献は以下のとおりである。

- 図1左上 古内 茂 2000「148高根木戸貝塚」『千葉県の歴史 資料篇 考古1(旧石器・縄文時代)』千葉県
- 図1右上 倉田恵津子 2000「141 子和清水貝塚」『千葉県の歴史 資料篇 考古1(旧石器・縄文時代)』千葉県
- 図1左下 西野雅人 2000「161 草刈貝塚」『千葉県の歴史 資料篇 考古1(旧石器・縄文時代)』千葉県
- 図1右下 川根正教 2000「138 中野久木谷頭遺跡」『千葉県の歴史 資料篇 考古1(旧石器・縄文時代)』千葉県
- 図4 赤山容造 1988「3縄文時代 前橋市 勢多郡 3 三原田遺跡」『群馬県史 資料篇1 原始時代1)』群馬県
- 図5左 小川和博 2000「167 東長山野遺跡」『千葉県の歴史 資料篇 考古1(旧石器・縄文時代)』千葉県

図5右 山梨県北杜市教育委員会 2018「史跡梅之木遺跡整備事業報告書」

参考文献

- 赤山容造編 1980『三原田遺跡第1巻住居篇』群馬県企業局
- 赤山容造 1988「3縄文時代 前橋市 勢多郡 3 三原田遺跡」『群馬県史 資料篇1 原始時代1』群馬県
- 海老原郁雄 1976『27浅香内遺跡「栃木県史 資料篇考古1 第四章 縄文時代」』栃木県
- 岡崎文喜ほか 1971『高根木戸』船橋市教育委員会
- 小川和博 1991『木田余台1』土浦市教育委員会ほか
- 2000「167 東長山野遺跡」『千葉県の歴史 資料篇 考古1 (旧石器・縄文時代)』千葉県
- 金子浩昌 1988「食料になった貝と魚とケモノ」『千葉市立加曾利貝塚博物館開館50周年記念特別講座講演集』
千葉市立加曾利貝塚博物館
- 金子拓男 1986「集落と住居」『新潟県史 通史編1原始・古代 第2章縄文時代の社会と文化 三中期の人々の生活』
新潟県
- 川根正教 2000「138 中野久木谷頭遺跡」『千葉県の歴史 資料篇 考古1 (旧石器・縄文時代)』千葉県
- 川根正教 2015「2狩猟・採集の時代 縄文時代の集落と中野久木谷頭遺跡」『ふるさと流山のあゆみ』
流山市教育委員会
- 倉田恵津子 2000「141 子和清水貝塚」『千葉県の歴史 資料篇 考古1 (旧石器・縄文時代)』千葉県
- 後藤和民 1970「原始集落研究の方法論序説—とくに縄文時代早・前・中期を中心として—」『駿台史学』第27号
駿台史学会
- 小宮俊久 1990「V 三原田遺跡出土機種別全石器」『三原田遺跡第2巻 (中期前半期～後半初頭期篇)』群馬県企業局
- 小宮俊久 1992「IV-3 三原田遺跡における打製石斧の形状の変化」『三原田遺跡第3巻 (中期後半期～後期初頭期篇)』
群馬県企業局
- 子和清水貝塚発掘調査団編 1976『子和清水貝塚 遺構図版編』松戸市教育委員会
- 子和清水貝塚発掘調査団編 1985『子和清水貝塚 遺物図版編2』松戸市教育委員会
- 鈴木 雅 2021『谷地遺跡 第1分冊 調査記録編』蔵王町教育委員会
- 清藤一順 1977「縄文時代集落の成立と展開—国分谷周辺地域における前期、中期を中心として—」『考古学から見た房総
文化の解明 2 縄文時代』財団法人 千葉県文化財センター
- 清藤一順 2015「付編 東地区七子和清水遺跡」『松戸市史 上巻 (改訂版) 原始・古代・中世』
- 清藤一順 2023「第一編 原始古代編第二章定住生活と土器のはじまり 縄文時代」『柏市史 (沼南町史 通史編)』
柏市教育委員会
- 高田 博ほか 1986「千原台ニュータウンⅢ 草刈遺跡 (B区)」財団法人 千葉県文化財センター
- 高橋良二ほか 1963「千葉県子和清水貝塚調査概報」『考古学雑誌』第49巻第2号 日本考古学会
- 高柳正春ほか 1973『千葉県流山市 中野久木谷頭C地点』流山市教育委員会
- 西川博孝、西山太郎 2011『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書4—柏市大松遺跡B区—縄文時代以降編1』
公益財団法人 千葉県教育振興財団
- 西川博孝、池田大助 2019『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書15—柏市小山台遺跡B区—縄文時代以降編 第1分冊』
公益財団法人 千葉県教育振興財団
- 西東京市教育委員会 2018『史跡下野谷遺跡保存活用計画～縄文から未来へ したのやから世界へ～』
- 西野雅人 2000「150 有吉北貝塚」『千葉県の歴史 資料篇 考古1 (旧石器・縄文時代)』千葉県
- 西野雅人 2000「161 草刈貝塚」『千葉県の歴史 資料篇 考古1 (旧石器・縄文時代)』千葉県
- 西野雅人、菅谷通保ほか 2017「第7章 第5節 動物遺体と資源利用」『史跡 加曾利貝塚 総括報告書』
千葉市教育委員会
- 二本松市 1998「上原A遺跡」『二本松市史第一編 考古』

- 橋本勝雄、小林清隆 2019『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書15 - 柏市小山台遺跡B区 - 縄文時代以降編 第3分冊』
公益財団法人 千葉県教育振興財団
- 古内 茂 2000「148高根木戸貝塚」『千葉県の歴史 資料篇 考古1 (旧石器・縄文時代)』千葉県
文化庁文化財部監修 2015「新指定の文化財」『月刊文化財』平成27年2月号 文化庁
- 北杜市教育委員会 2018『史跡梅之木遺跡整備事業報告書』
- 堀越正行 1972「縄文時代の集落と共同組織 - 東京湾沿岸地域を例として -」『駿台史学第31号』駿台史学会
- 堀越正行 1976「小竪穴考(2)」『史館第6号』史館同人
- 堀越正行 1977「小竪穴考(3)」『史館第8号』史館同人
- 道沢 明 1990『東・北長山野遺跡』北長山野遺跡調査会
- 山田貴久、西野雅人ほか 1998『千葉東南部ニュータウン19 - 千葉市有吉北貝塚1 (旧石器・縄文時代) -』
財団法人 千葉県文化財センター
- 早稲田大学 2023『下野谷遺跡Ⅵ 縄文時代中期(5)』